

重度・重複障害のある子どもの実態把握、教育目標・内容の設定、及び評価等に資する情報パッケージの開発研究

研究の目的

重度・重複障害のある子どもの個別の教育支援計画、個別の指導計画の作成と実施において、実態把握、教育目標・内容の設定、評価というPDCAサイクルのプロセスに困難さを感じている教員や学校は少なくない。また、困難さとともに、「実態把握の観点がまちまち」「担当者によって指導内容や方法が変わる」「学習内容が家庭・地域の生活と結びついていない」「卒業時のゴール設定があいまい」等、様々な課題が指摘されている。

本研究では、本人中心の計画(Person-Centered Planning:PCP)の考え方にに基づき、このPDCAサイクルのプロセスに資する情報をパッケージとして提供することにより、上記の課題の解決を図ることを目的とする。

研究の概要

情報パッケージ(試案)を作成し、試用の成果を検証した。

① 予備的・準備的段階:

学校現場(視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由等の特別支援学校)、卒後の施設等からの情報収集を行い、現状における課題整理を行う。また、「本人中心の計画:PCP」に関する文献や諸外国の文献に照らした導入の在り方について検討する。

② 試案作成段階:

情報パッケージの基本的な考え方、各項目の内容と構成を検討する。さらに、現行の学習指導要領と情報パッケージの基本的な考え方について解説を行う。各項目について、比較的経験の浅い教員にも読みやすく共有しやすいフォーマットを検討する。研究スタッフ、研究協力機関、協力者が分担して執筆を行い、情報パッケージ(試案)を作成する。

③ 試用と成果の検証段階:

研究協力機関9校(肢体不自由、知的障害、視覚障害、聴覚障害を対象とする特別支援学校)がモニターとなり、情報パッケージ(試案)を試用する。各機関より、活用の仕方、活用の成果、改善を必要とする点についてフィードバックを得る。活用の成果を検証するとともに、情報パッケージにフィードバックを反映する。

情報パッケージ通称の意味

情報パッケージの通称を「ぱれっと(PALETTE)」とした。

- P Plan and
- A Action tools for
- L Living and learning of
- E Every child's
- T Today and
- T Tomorrow through
- E Education



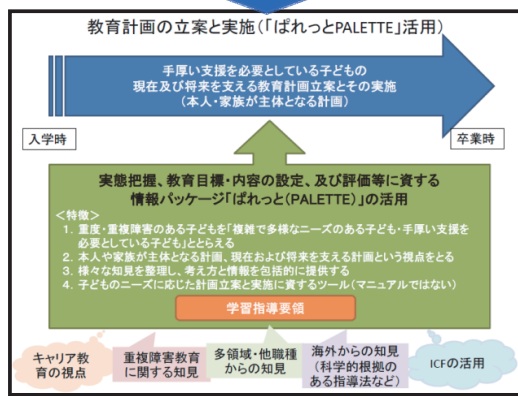
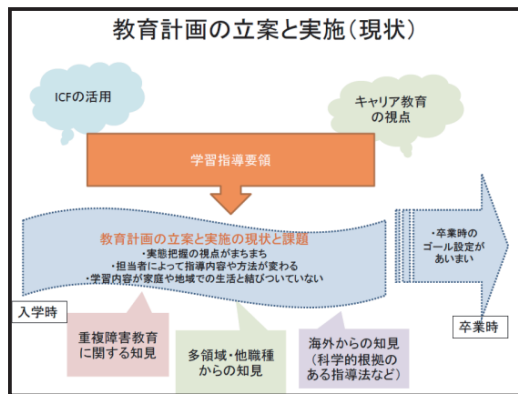
この通称は「子どもたち一人一人が、お気に入りの色を選んで、思い思いの将来の夢を描き実現するツールとする」というイメージを重ねている。

フランス語のPALETTEということばには、「パレットに出した有限の色を複数組み合わせることで、すべての色を作り出すことができる」という意味がある。

教育領域における、「本人中心の計画:PCP」には難しい課題もある。しかし、限られた資源や制約のある中で、子どもや保護者を含むチームが知恵を絞って、できることを組み合わせることで、手厚い支援を必要としている子どもへのニーズに応える色を作りだせるようにしたい、という願いが込められている。

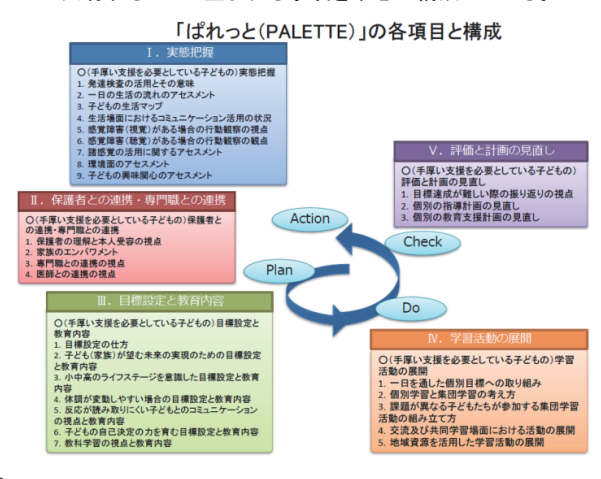
情報パッケージ活用で期待される成果

情報パッケージ「ぱれっと(PALETTE)」を活用することによって、以下のような成果が期待できる。



情報パッケージの内容と構成

情報パッケージ「ぱれっと(PALETTE)」は、手厚い支援を必要としている子どもを担当する教員に、PDCAのプロセスにおける本人中心の計画の視点や考え方を提供する。また、教員集団として共有することが望まれる事項を中心に構成している。



情報パッケージ「ぱれっと(PALETTE)」は、研究協力機関9校(肢体不自由、知的障害、視覚障害、聴覚障害を対象とする特別支援学校)において活用され、その成果が報告されている。今後、重度・重複障害のある子どもが学ぶ学校(特別支援学校、小・中学校等)で、以下のような活用が考えられる。

- ・個別の教育支援計画・指導計画の作成、見直し時の活用
- ・ケース会議における活用
- ・職員研修、人材育成における活用

等々

研究代表者: 齊藤 由美子

重度・重複障害のある子どもの実態把握、教育目標・内容の設定、

及び評価等に資する情報パッケージの開発研究

(平成25年度～26年度)

【研究代表者】 齊藤 由美子

【要旨】

本研究の目的は、重い障害のある子どもの実態把握や、目標と指導内容の設定、適切な評価と指導・支援の改善という PDCA の過程に必要な視点や情報を提供する情報パッケージを作成し、現場での活用のしやすさや有用性を検証することである。本研究では、この情報パッケージの対象となる重い障害のある子どもを「複雑で多様なニーズのある子ども＝手厚い支援を必要としている子ども」と定義した。そのうえで、手厚い支援を必要としている子ども（及び家族）の「現在及び将来を支える教育計画を作成し実施する」という本人中心の計画（Person-Centered Planning）の観点から、個別の教育支援計画、個別の指導計画等の作成と実践に資する情報パッケージ「ぱれっと（PALETTE）」（試案）を作成した。研究協力機関においては、この情報パッケージ「ぱれっと（PALETTE）」（試案）について、①学校全体の取組に位置付けた活用、②研修や人材育成等における活用、③ケース検討等における活用等が行われた。活用の仕方を工夫することによって、この情報パッケージが教育計画（個別の教育支援計画、個別の指導計画）の立案と実施に役立ち、また、教員の振り返りを促したり、関係者同士が子どもの理解や方針を共有したりするツールとなりうることが検証できた。さらに、今後の普及に向けて情報パッケージの改良点が検討された。

【キーワード】

手厚い支援を必要としている子ども、本人中心の計画（Person-Centered Planning）、個別の教育支援計画、個別の指導計画

【背景・目的】

平成 21 年に告示された特別支援学校の学習指導要領では、在籍する幼児児童生徒の障害の重度・重複化、多様化に対応し、一人一人の教育的ニーズに即した適切な教育や必要な支援を行う観点により明確になっている。平成 24 年度に実施した本研究の予備的、準備的研究では、特に重い障害のある幼児児童生徒について、適切な実態把握・評価、長期的な目標設定、家庭や地域の生活と関連付けた教育内容の設定等に、多くの学校が必要性を認識しながらも困難を感じているという実態があった。

本研究の目的は、重い障害のある子どもの実態把握や、目標と指導内容の設定、適切な評価と指導・支援の改善という PDCA の過程に必要な視点や情報を提供する情報パッケージを作成し、現場での活用のしやすさや有用性を検証することである。本研究では、この情報パッケージの対象となる重い障害のある子どもを「複雑で多様なニーズのある子ども＝手厚い支援を必要としている子ども」と定義した。そのうえで、手厚い支援を必要としている子ども（及び家族）の「現在及び将来を支える教育計画を作成し実施する」という本人中心の計画（Person-Centered Planning）の観点から、個別の教育支援計画、個別の指導計画等の作成と実践に資する情報パッケージ（試案）を作成するとともに、学校現場での有用性の検証を通じ、その改善充実を図ることを目指すこととした。

【方法】

本研究は、平成 24 年度の予備的、準備的研究の成果が、平成 25 年-26 年度の専門研究 B へと引き継がれた研究である。以下の研究活動を 3 年計画で実施した。

- (1) 学校現場等における課題の整理
- (2) 国内外の文献研究
- (3) 情報パッケージのコンセプト・概要等の検討
- (4) 情報パッケージに含む事項の検討及び情報収集
- (5) 情報パッケージ（試案）の作成
- (6) 研究協力機関における情報パッケージ（試案）の活用
- (7) 研究協力機関における活用の成果の検証
- (8) 情報パッケージ（試案）の改良に向けての検討

平成 24 年度に実施した予備的、準備的研究では、上記研究内容のうち（1）学校現場等における課題の整理、（2）国内外の文献研究を中心に行った。これらの研究活動の成果は、専門研究 B の実施に向けて具体的な研究計画を立案する基礎資料となった。さらに、（3）情報パッケージのコンセプト・概要等の検討、（4）情報パッケージに含む事項の検討を行い、情報パッケージに掲載する項目の原案を作成した。

平成 25 年度には、研究協力者、及び公募による研究協力機関 7 校の協力のもと、（4）情報パッケージに含む事項の検討及び情報収集を行った。この段階においては、所内研

究員が各研究協力機関を訪問し関連情報の収集を行いつつ、情報パッケージに含む事項への反映を検討する作業を繰り返し行った。また、項目の検討に関しては、研究協議会等において、研究協力者、研究協力機関からのフィードバックを反映した。さらに、(5) 情報パッケージ(試案)の作成については、所内研究員、各研究協力校、研究協力者が項目等を分担して、情報パッケージの試案を作成している。

平成26年度には、各研究協力機関において、(6) 研究協力機関における情報パッケージ(試案)の活用をパイロット的に実施した。(7) 研究協力機関における活用の成果の検証としては、各研究協力機関における活用の状況とその成果を報告書にまとめるとともに、調査票を用いて活用前後での教員の教育実践における変化や意識の変化の検証を行った。さらに、研究協力者、研究協力機関、その他関係者からの意見や感想等を参考にして、(8) 情報パッケージ(試案)の改良に向けての検討を行っている。

【結果と考察】

(1) 学校現場等における課題の整理、及びその解決のための「本人中心の計画(Person-Centered Planning)」導入の検討

① 学校等の現場における課題の整理

様々な障害種を対象とする特別支援学校、また、学校卒業後の生活の場となる施設を訪問して観察と職員へのインタビューを行い、現状と課題を整理した。さらに、過去の研究において実施したインタビューデータをもとに、重複障害教育に携わる専門性の高い教員の専門性の在り方とその形成過程について質的な分析を行った。

この分析から、特に重い障害のある子どもについて、適切な実態把握・評価、長期的な目標設定、家庭や地域の生活と関連付けた教育内容の設定等に、多くの学校が必要性を認識しながらも困難を感じているという実態、学校卒業後の施設と学校教育現場との認識のギャップや連携の少なさ等が明らかになった。また、重い障害のある子どもの教育の専門性について、必要な専門的知識や技術を組織的に確保する仕組みの必要性、累積型の専門性(知識や技術等の獲得)のみでなく、深化型の専門性(子どもの理解や省察する力を高めること)を意識することの重要性、等が示唆された。

② 国内外の文献の収集・整理

我が国における個別の指導計画導入の経緯と関連文献について整理を行った。また、諸外国において、重い障害のある子どもの教育計画の作成に用いられている「本人中心の計画(Person-Centered Planning)」のアプローチについてレビューを行った。上記の課題解決のために、「本人中心の計画(Person-Centered Planning)」のアプローチを日本に導入することについての可能性を検討した。

(2) 情報パッケージ(試案)の作成

① 情報パッケージの構想

上記の学校等の現場における課題や国内外の知見の整理を受けて、情報パッケージ

では、以下に挙げる意義を重視した。

- 1) 「軸となる考え方」(本人中心の計画<Person-Centered Planning>)に基づいて情報や知見を整理し、パッケージとして提案することの意義
- 2) 「手厚い支援を必要としている子ども」に焦点をあてることの意義
- 3) マニュアルではなく「考えることをサポートするツール」を目指すことの意義
- 4) 子どもに関わる関係者が「共有できるツール」を目指すことの意義

個別の教育支援計画、個別の指導計画の立案と実施にかかる現状の課題(図1)と、情報パッケージ活用後に期待される状況(図2)のイメージ図を示す。

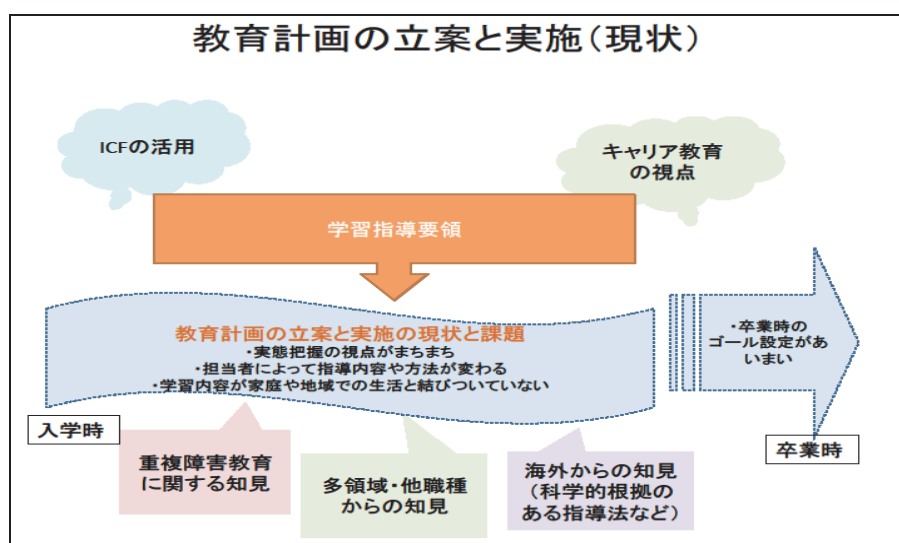


図1. 教育計画の立案と実施にかかる現状と課題のイメージ

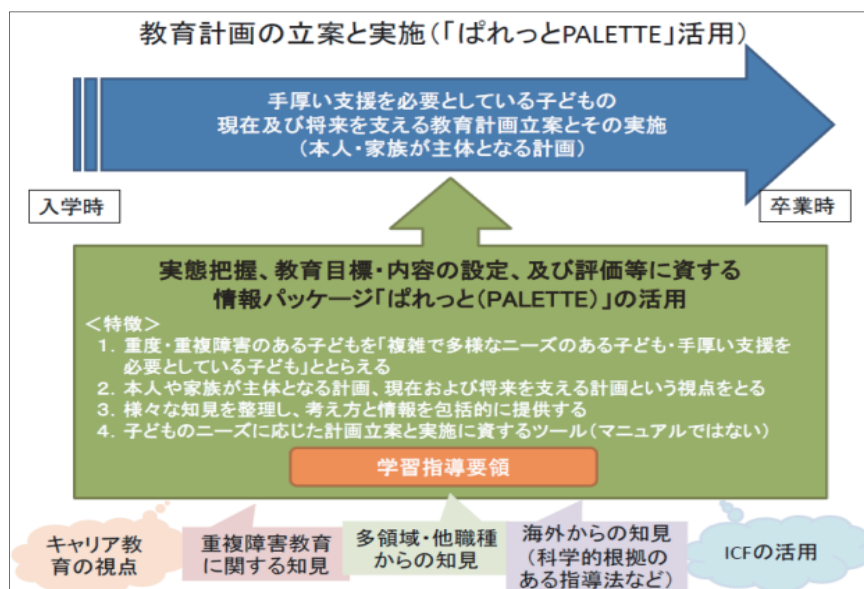


図2. 情報パッケージを活用した際の教育計画の立案と実施のイメージ

情報パッケージの各項目と構成

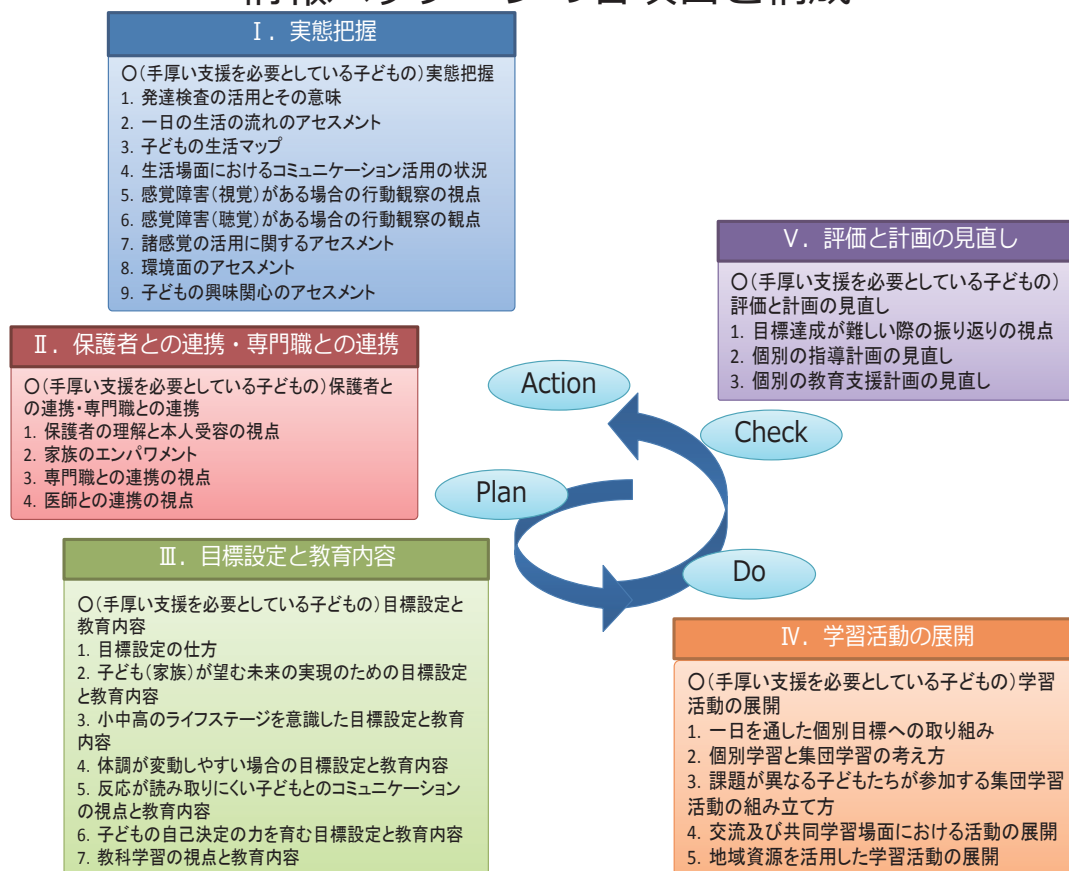


図3. 情報パッケージの各項目と構成 (試案版)

②情報パッケージ (試案) の項目と構成

情報パッケージ (試案) のどのような内容を盛り込むかについては、所内研究員の原案を基に、研究協力者、研究協力機関との協議を重ね検討した。最終的に情報パッケージ (試案) に掲載した項目と構成を図3に示す。各項目は、表1のフォーマットに基づいて4~6ページとコンパクトにまとめることとした。

また、情報パッケージの通称を「ぱれっと (PALETTE: Plan and Action tools for Living and leaning of Every child's Today and Tomorrow through Education)」とすることとした。さらに情報パッケージの軸となる考え方 (「本人中心の計画 (Person-Centered Planning)」の考え方) を解説し、この考え方と特別支援学校学習指導要領との関係を資料とすることとした。

以上の検討に基づき、情報パッケージ「ぱれっと (PALETTE)」(試案) を作成した。

表 1. 情報パッケージの各項目のフォーマット

(例は、I. 実態把握の「2. 一日の生活の流れのアセスメント」の項目より)

<p><こんなことはありませんか？></p> <p>教育現場で教員が対応に困りがちな状況やエピソードを具体的に紹介</p> <p>例：視覚障害、知的障害、肢体不自由のあるエミリさんについて、保護者の「一人で遊べるように」という希望に応えたいのですが、どこから取り組んだらよいか分かりません。</p> <p><ここがポイント！></p> <p>考え方のポイントを提案</p> <p>例：子どもの一日の生活の流れを把握し、子どものニーズや保護者の希望が生じる具体的な場面を知り、家庭と連携した取組を行いましょう。</p> <p><このように考えてみましょう></p> <p>上記のポイントで紹介した考え方を解説</p> <p>例：学校以外の場で子どもがどのように過ごしているかは重要な情報、健康面など一日をトータルで見ることが大切、家庭で生じている子どものニーズや保護者の希望を知って学校での教育目標や内容を検討する視点が子どもの生活を豊かにすること、等を解説。</p> <p><具体的な実践に向けて使えるツール・ポイント></p> <p>上記の考え方に基づいて、具体的な実践に向けて活用できそうなツール等を提案</p> <p>例：保護者と共に子どもの一日の生活の流れを振り返り、家庭でのニーズを把握したうえで目標や内容を検討するための表を提案。</p> <p><これを実践してみたら></p> <p>最初に挙げたエピソードについて、上記のツールを用いて解決に向かった状況を紹介</p> <p>例：エミリさんの一日の生活の流れについて、上記ツールを用いて家庭と学校とで検討した結果、教員は保護者の「家事をしている時間に一人で遊んでほしい」という願いを理解し、「好きなテレビやDVDを見ることで、一人で楽しめるのでは」というヒントを得た。学校では、「見たい動画に替えてほしいときに VOCA で大人を呼ぶ」ことを目標設定できた。</p> <p><もっと知りたい人はこちら></p> <p>この項目で採り上げた内容に関連した本、ウェブページなどの情報を紹介</p> <p>(ここでは例を省略)</p>
--

(3) 研究協力機関における情報パッケージ「ぱれっと (PALETTE)」(試案) の活用と成果

研究2年目より新たに研究協力機関を2校加え、計9校の研究協力機関に、情報パッケージ「ぱれっと (PALETTE)」(試案) について、パイロット的に活用をお願いした。研究協力機関における活用結果については、①学校全体の取組に位置付けた活用、②職員研修・人材育成等における活用、③ケース検討等における活用、④教員個々における

活用と興味・感想等の分析の4つのタイプに分類できた。

さらに情報パッケージ「ぱれっと (PALETTE)」(試案)の活用に当たり、活用前、活用後に教員対象のアンケート調査を行った。その結果、「情報パッケージ(試案)を読むだけでなく自身の実践に結び付けながら活用した」と思われる群では、「目を通したもののあまり実践的に活用していない」と思われる群に比べ、活用後に、各項目に関する実施の状況や意識にポジティブな変化が見られた。

【総合考察】

情報パッケージ「ぱれっと (PALETTE)」(試案)は、「本人中心の計画(Person-Centered Planning)」の考え方を軸としているが、この考え方は日本において福祉領域で先に導入されているものの、教育領域への導入には多くの困難が伴うことが予想された。本研究を通して、この考え方を学校教育において実践するツールを開発できたことの意義は大きい。

また、研究協力機関の活用状況から、この情報パッケージ(試案)が、手厚い支援を必要としている子どもの教育計画(個別の教育支援計画、個別の指導計画)の立案と実施に役立ち、さらに、①教員の子ども理解や振り返りを支援するツール、②子どもに関わる関係者が共有できるツール、として機能する可能性を検証することができた。活用の方法としては、学校全体の取組に位置付けた活用、人材育成やケース検討等での目的的な活用、等が事例として挙げられている。効果的な活用の条件として、「情報パッケージ(試案)を読むだけでなく、自身の実践に結び付け考えながら活用すること」や「情報パッケージ(試案)をそのまま教員全体に向けて提示するのではなく、翻訳者の立場の教員が個々の教員にとって必要な情報や知見を分かりやすく説明し、考えることを支援すること」等が重要であることが示唆された。

今後は、検討した改良を加え刊行する予定である。本研究の成果が手厚い支援を必要としている子どもの自立と社会参加や、QOLの向上の一助となることが期待される。

【成果の活用】

- ・作成した情報パッケージ「ぱれっと (PALETTE)」(試案)について、日本特殊教育学会第52回大会(高知大学)においてポスター発表を行った。
- ・平成26年度研究所セミナーにおいて研究成果の報告と参加者との協議を行った。
- ・改良を加えた情報パッケージ「ぱれっと (PALETTE)」を刊行予定。特別支援学校、小・中学校等、教育センター等での研修、福祉領域との連携等、様々な活用が期待できる。